

松本清張記念館

特集号
2026.3



令和7年度 中高生読書感想文コンクール

感想文紹介

最優秀賞 中学生の部

題
敗北を資本に

課題作品

「徳川家康」



やまだ さくらこ
山田 桜子
筑波大学附属中学校
2年

松本清張の『徳川家康』を読み進めながら私はこれまで抱いていた家康像が静かに揺らいでいくのを感じた。歴史の教科書で目にする家康は、慎重で計算高い天下人、あるいは「待つことに徹した男」として描かれることが多い。しかしこの本は、その表面的な評価の奥にある「人としての恐れ」や「弱さを直視する勇氣」を丁寧に描き上げていた。読み終えたとき、家康はただの策略家でも英雄でもなく、「恐れを手放さず、それでも未来を築こうとした人」として私の心に残った。

特に印象的だったのは、「個人の力のはかなさを知った家康は、組織の力に頼ったのである」という一文である。戦国の世は、兄弟すら出世のために殺し合う残酷な時代だった。家康自身も幼いころから人質として駿府や今川家に送られ、常に生死の境に置かれていた。少年でありながら、自分の存在が政治の駒として翻弄される恐怖を味わった経験は、彼に「人は一人では無力だ」という感覚を早くから刻み込んだのだろう。勇氣や腕力だけでは生き残れない現実を知ったからこそ、家康は一人で強がるの

ではなく、人と結びつき、組織の力を信じる道を選んだ。人質時代の孤独は、後に江戸幕府という大きな共同体を築く礎になったのだと思う。

人は弱さを突きつけられると、虚勢を張って強さを装いたくなるものだ。だが家康はむしろ、自分の限界を正直に見つめ、その上でどうすれば生き延びられるかを考え抜いた。彼の慎重さは、臆病さの裏返しではなく、恐れを受け入れた者だけが持てる現実感と知恵だったのだと感じた。その姿を象徴する出来事の一つが、三方ヶ原の闘いで敗北である。若き家康は武田信玄に挑み、大敗を喫した。城へ逃げ帰る途中、家康は恐怖で馬上で失禁し、惨めな姿をさらしたという逸話は有名な。英雄らしからぬ弱さの露呈であるが、清張はその姿を笑い話ではなく「人間家康の転機」として描いている。屈辱の敗北を経て、家康は二度と無謀な戦を仕掛けず、慎重に情勢を見極めることに徹した。つまり恐れと失敗を経験したからこそ、彼の天下人へとつながる冷静な判断力が育まれたのだ。清張の描く家康からは、人は挫折のときにこそ成長するというその真実が伝わってきた。

また、京都の地震の場面も忘れられない。家康には秀吉を討つ絶好の好機が訪れるが、彼はあえて手を下さなかった。単なる義理堅さだけでは説明できない決断だ。短期の勝利を優先すれば孤立と報復が待っていること、秀吉を裏切れば将来の道が閉ざされることを、彼はよく知っていたのだろう。「ふところに入った鳥は殺さない人」と秀吉に評されたのは、相手を無闇に敵に回さず、信義を残して未来へ備える家康の在り方を見抜いた言葉に思えた。恐れを無視する勇者ではなく、恐れを計算に入れた知者が、清

張の家康から立ち上がってくる。

私はこの家康の姿に、現代を生きる自分たちの課題を重ねた。いまの社会では「恐れず挑戦する」「一人で道を切りひらく」という言葉が称賛されることが多い。しかし現実には、私たちは弱さや不安を抱えたまま未来を選んでいかなければならない。だからこそ、家康のように自分の限界を受け入れ、他者とながら、協力の力を信じる姿勢は大きな示唆を与えてくれる。恐れを感じることが決して恥ではない。それを知ったうえで、どう備え、どう未来をつくるかが重要なのだと気付かされる。さらに、家康の慎重さには暗さだけではなく、希望が宿っているようにも思った。人質時代に学んだ孤独の苦しみも、三方ヶ原の敗北の屈辱も、すべては「人は一人では生きられない」という教訓へと変化していった。彼は恐れの中で人を信じる選択をした。孤立よりも信頼を、短期の勝利よりも長期の安定を選んだ。その先に築かれた江戸幕府の平和な時代は、まさに人と人とのつながりを重んじた結果でもある。清張の描いた家康は、単なる歴史上の偉人ではなく、弱さと恐れを抱えながらもそれを希望に変えたひとりの人間として描き出していた。強くあろうとすることだけが未来をひらくわけではない。自分の脆さを知り、それでも歩みを止めず、周囲と力を合わせて生き抜く。その静かな勇氣こそが、家康を天下人に押し上げたのだと感じる。

そして今、私自身もまた進路や未来に迷う若者の一人として、家康の姿に励まされる。恐れや不安を抱く自分を否定するのではなく、それを知恵とながりの力に変えていく、その在り方を私も学び取りたいと思う。

優秀賞

題
父娘の「荒野」

課題作品

「球形の荒野」



かわい まな
河井 麻那

東洋英和女学院
中学部 3年

本書では、中立国の大使という、あの時代にとっても難しい立場に置かれた一人の男が描かれている。

彼は祖国の破滅を救うために連合国との和平工作を企図した。そのため、彼は妻子を捨て、祖国を捨て、あえて自分が死亡したこととして、連合国側につき別の人間として生きることを選んだのである。その選択は、誰よりも彼自身を苦しめるものだったはずだ。平和のために自分の幸福を犠牲にするという生き方は、決して容易なことではない。家族と過ごす時間や父としての喜びを失い、孤独に耐え続ける人生は、想像を絶する重みを持つ。しかし、彼はそれをあえて選び取った。そこには、「自分ではなく多くの他人の幸せを優先する」という彼の強い信念があったのだろう。

一方、戦争によって父をなくしたと知らされていた娘は、未だに父を慕いながら、父のような広い視野をもち、世界を見つめつつ成長していった。父を思う気持ちに変えられなかったのだろうか、父の死を公式に告げられていながらも、心の

どこかで「もしかすると父は生きていたのではないか」と思わずにはいられなかった。周囲で起こる奇妙な出来事に導かれ、やがて浜辺で自分に注がれる視線を感じる。その視線の主が、京都で出会ったフランスの婦人であることに気づき、さらに近づいてきた日本人らしい黒メガ

ネの老紳士と会話を交わすうちに、その人物こそ父であることを悟るのだった。娘が父だと気づいたのはどの瞬間だったのか。浜辺で母のことを聞いてきたからなのか、それ以前の直感だったのか。私には想像しかできないが、別れの前に二人で口ずさんだ「七つの子」の歌は、一瞬にして平和だった幼稚園のころに戻り、父と娘の心を結びつけ、確かな絆を感じさせた。

しかし、最後まで娘は父の名前を呼ばなかった。それは、父が自らの人生を犠牲にし、「自分ではなく多くの他人の幸せを優先する」父への尊敬の念だと感じた。娘にとって父は、会いたいだけの存在ではなく、平和を背負った人間として刻まれたのだろうか。私はその姿に、尊敬というのは言葉のみならず態度に現れるのだと学んだ。

男は祖国を救うために祖国を捨て、家族との別れを選び、偽りの人生を選ばざるを得なかった。その選択が正しかったのか、意味があったのか、確かめずにはいられなかったのだ。娘が父の存在を確信し、最後に心を通わせたことで、彼の選択が意味があったのだと伝わってきた。父と娘は長い時を隔てても、絆を再確認することができたのだ。もしも二人が再会することなく生涯を終えていたなら、両者にとつて、戦争が残した爪痕は更に深く、癒えることのないものになっていったに違いない。

終戦から八十年が過ぎた。私も私の親も戦争を経験していない。戦中に生まれた祖父母でさえも、当時の記憶は年とともにあいまいになってきている。私はこれまで、戦争について考えるとき、「二度と起きてほしくない歴史の出来事」や「国と国の争い」といった視点ばかりに目を向けていた。しかし、この本を通して見えてきたのは、父と娘の物語だった。戦争は、こうした家族の生活や絆を突然奪い去ってしまうものだと感じた。

松本清張は、戦争を単なる歴史的事実としてではなく、戦争を体験した人がその後、心にどのようなものを残し、その影響によりその後どのように生きていくのかを描いている作品が多い。本書を読んでも、私は、戦争を単なる「歴史の出来事」ではなく、「今を生きる私達の課題」として考える必要があると思った。戦争を経験していない世代であるわたしたちが、文学などの作品を通じて人々の体験を想像し、学び続けていくことこそ、戦争を二度と繰り返さないための力になるのだと感じた。そして、たとえ直接の体験を持たなくても、このような、父と娘の絆という想像し易い物語を通してこそ、戦争の重さを自分の問題として受け止められているのだと思う。

私は本書を読み、平和のために自分の幸福を犠牲にするという生き方について深く考えさせられた。今の時代に生きる私にとつて、「平和」とは当たり前のもののように思えるが、誰かの犠牲や苦悩の上に成り立っている脆弱なものなのだ。男が選んだ道は、家族とともに過ごす日

常ではなく、多くの人が平和に過ごすこと。その決断があったからこそ未来の平和につながったのだと思う。私はその姿勢に、平和を守ることとは、単に戦争を避けることではなく、日常の中で、自分の利益や幸福よりも他者を思う心を、他者を思いやる選択を重ねていくことなのだと思つた。平和をつなぐ第一歩は、きつとそこから始まるのだと思う。



優秀賞

題
球形の荒野に立ちすくむ時

課題作品
「球形の荒野」



のりとも とうと
乗富 悠仁
福岡県立
筑紫丘高等学校
2年

私はもともと本を読むのが好きだったが、気がつけば近年は漫画ばかりに手が伸びるようになっていた。そんな自分を少し変えたいと思い、今回は読んでこない松本清張の作品「球形の荒野」に挑戦した。この作品は映画化やドラマ化もされており、多くの世代に読み継がれていることから、その普遍の魅力を直接感じてみたいと考えたのだ。

この作品は、戦後日本の混乱と再生の中で偶然見つけた芳名帳の特征的な字を元に、戦後死亡したとされていた外交官、野上顕一郎を娘の久美子や周りの人々が真相を追う物語だ。推理小説としての魅力だけでなく、戦争という背景が物語に深い陰影を与え、私を強く惹き寄せた。本作を通じ、「言葉にしない愛情」「沈黙でも伝わり合う想い」という問いに直面させられた。真実の探究の上での正義について考えさせられた。

その中で最も心を打たれたのは、物語のラストシーン、父と娘の再会の場面だ。顕一郎は長い沈黙を貫き、自らが生き

戦中の複雑な立場と、国家機密に深く関わっていた過去があったからである。彼は自らの正体を明かせば、娘やその周囲の人間に迷惑をかけると考え、あえて沈黙を選んでいた。

しかし、久美子の探求心と、父を想う気持ちが顕一郎を動かす。父はついに再会の場に出現し、感情を押し殺しながらも、「自分の存在が娘にとって不幸であってはならない」と答えを出し、久美子はこれに対し涙する。再会の場面は決して劇的ではなかった。むしろ淡々とした描写だった。しかしその静けさの中に、二人の会えなかつた年月、父の苦悩、娘の愛情がつまっており、読後余韻に浸った。

第二段落に戻るが、このラストシーンを読み私は、文中には無い二人の想いについて深く考えさせられた。人は、相手のために思い距離をとることがある。しかし、それが本当に正しいのか、その沈黙は相手にどう受け止められるのかということとを、常に問い直す必要がある。親子でも完全に互いを理解することはできない。だが、久美子と顕一郎の再会の場面には、



言葉は不要な程のきずなの強さが描かれていた。松本清張はこの物語で、戦争の記憶や社会の裏側を描くだけでなく、人が過去とどう向き合うべきか、他者の沈黙にど

う寄り添うかという、人間の核心を問いかけてくる。顕一郎の沈黙は、彼なりの愛の表現であり、久美子もその沈黙の意味を、自分なりに受け止めようとする。その姿勢に、私は心を打たれた。

作中の滝の発言に、「彼(顕一郎)にとっては、地球そのものが荒野さ」というタイトルと重なるものがあった。私はこの意味に少し疑問を抱いたが、自分なりに解釈を行った。「球形の荒野」というタイトルは、どこまでも広がる孤独と、そこにぼつりと立つ人間の姿を想像させる。そして「立ちすくむ」という状態は、この作品の本質を象徴するように思う。人は真実の前に、ただ立ち尽くすだけの時もある。しかしそこから目を逸らさず、見つめることが、一歩先へ進む力となるのだ。私は「球形の荒野」を読み終えた今、真実を知ることの勇氣と、誰かの沈黙の意味を理解する姿勢の大切さを改めて実感した。



『球形の荒野』上下(文春文庫)



『徳川家康』(角川文庫)



竹田りえさんによる、課題作朗読

佳作

中学生の部

山本 凛
やまもと りん

筑波大学附属中学校 2年
題 圧倒された二冊(遭難)

佐々木 多聞
ささき たもん

筑波大学附属中学校 3年
題 家康だから築けた
平和な江戸時代(徳川家康)

箭内 智子
やない ともこ

昭和女子大学附属昭和中学校 3年
題 執着(遭難)

高校生の部

橘 葵衣
たちばな あおい

金沢大学附属高等学校 2年
題 確率の上の殺意、
備えの中の希望(遭難)

芝田 千紗季
しばた ちさき

愛光高等学校 2年
題 ノスタルジー(球形の荒野)

五味 愛琳
ごみ まりん

早稲田大阪高等学校 2年
題 緻密に計算された殺人(遭難)

第24回目となる令和7年度の読書感想文コンクールには、全国から282点の応募がありました。

令和7年11月5日の最終選考で受賞者が決定し、最優秀賞については令和8年2月7日に松本清張記念館で表彰式を行いました。

審査講評

選考委員

田中光子



「昭和百年」戦後八十年にあたる今年度は、終戦工作にかかわった外交官の運命を描く長編ミステリー『球形の荒野』と、伝記小説『徳川家康』、可能性の犯罪を追究した山岳ミステリー『遭難』が課題作であった。最優秀賞の山田桜子さん(筑波大学附属中学校2年)は、『徳川家康』の人間らしさに焦点をしばった。清張は、家康は三方ヶ原での敗北から慎重にことを進めること、組織の力に頼ることを学んだ、と分析する。そこから山田さんは、「恐れず挑戦する」「一人で道を切り開く」という言葉が称賛されがちな現代においても、正しく恐れ、他者を信じてつながることが大切だ、と応じる。その文章力から、これまでの読書量の蓄積がしのばれた。

優秀賞の河井麻那さん(東洋英和女学院中学部3年)と乗富悠仁さん(福岡県立筑紫

選考委員紹介

(五十音順、敬称略)

田中光子

松本清張記念館
統括プロデューサー

十重田 裕一

早稲田大学文学学術院
教授

丘高等学校2年)は『球形の荒野』を読破された。

河井さんは父娘の再会の場面を深く読み込んだ。最後まで父の名前を呼ばないことで娘は、父の生き方を許し、肯定したのだ、と。

乗富さんは本作を選んだ理由やあらすじを適切にまとめながら、戦争の記憶のみならず、他者の沈黙にどう寄り添うかをテーマとしてつかみ取った。

いずれもご自身のことばで作者の意図した以上のものを読み取った、すばらしい感想文だったと思う。

本物の戦争を体験していなくても、戦争を描いた文学を読み、想像することによって、私たちはより広い視座を持つことが可能になる。

『戦争×文学』(集英社、全20巻)は、戦場を経験した作家の小説だけでなく、イマジネーションの戦争、女性たちの戦争など、さまざまな切り口から中短編を選んだ画期的なアンソロジーである。清張作品では『黒地の絵』『厭戦』『ハノイからの報告』が収録されている。本好きの若い皆さんに、一読をお勧めしたい。

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813 北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761 FAX 093(562)2303
https://www.seicho-mm.jp

制作 (株)ハーティブレーン



イラスト: 山藤 章二

- ❖ 開館時間 午前9:30~午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- ❖ 休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌日)、年末年始(12/29~1/3)、館内整理日
- ❖ 観覧料 一般/600円(480円)、中学生/360円(280円)、小学生/240円(190円) ※ ()は30人以上の団体
- ❖ アクセス JR:小倉駅から徒歩20分 西小倉駅から徒歩10分
小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車:北九州市高速 大手町ランプより5分



※当館専用駐車場はございません。隣接する市営駐車場をご利用ください。